

『肉食弟×童貞兄 執着 溺愛 監禁 ～俺が全部、教えてやるよ～』

著：涼白スズナ

ill：いけや

「あのさ、官能小説なんて童貞の一季に書けるの？」

極めて冷静な声で容赦なく篤人が訊ねる。

「う……………」

一季の声が詰まった。

「そりゃ、いかに童貞力を発揮して凄まじい妄想のもとにエロ小説を書き上げられる人はいないとは言わないけどさ。むしろそっちの方がエロって話も聞くし。でも、一季にできるの？ それ」
ふふん、と篤人がせせら笑う。

「だから篤人に頼もうと思って。篤人なら女の子の知り合い多いし……それに女の子とのつき合い方も知ってるかな……って」

ぼそぼそと聞き取れるか聞き取れないかくらいの声で一季が言った。

すると、はあ、と篤人の大きな溜息が聞こえた。

「それって随分俺に失礼じゃない？ それに俺の知り合い紹介したところで、すぐに一季が官能小説書けるようになるわけないだろ」

いかにも呆れたとばかりにもう一度大きな溜息をついて、篤人がぐるりと部屋を見渡した。

そんなことは自分だってわかっている。根本的に一季の性欲は薄い。

本棚に並んでいるのは好きなSFやミステリー小説だけだ。ゲームのシナリオライターだけれど、エロゲには手を出したこともなければ、グラビアアイドルにもAVにも興味がない。資料のために抜けると評判の本を買い込んで読んでみたが、あまりに恥ずかしくてすぐにページを閉じてしまった。およそ性とは無縁の自分に官能小説など書けるわけがないのはわかっている。

「ごめん。……でも……やらなくちゃなんないし……」

泣きそうな顔で一季は篤人を覗き込むように見上げた。

頼みの綱は篤人だけだ。篤人に女の子を紹介してもらうとか、じゃなければ、おすすめの風俗を紹介してもらって……とまで考えて、しまったリア充の弟には風俗なんか必要なかった、と視界に映るイケメンを羨ましく思いながら項垂れた。

篤人はそれ以上にも言わず、沈黙が訪れる。やっぱり怒らせてしまったらろうか、そう一季はきゅつと唇を噛んだ。

篤人はしっかりしていて、いつも一季の面倒を見てくれる。それこそ過保護なくらいに世話を焼く。

一季のひと言で相談に乗ってくれるなんて、忙しい社会人にはなかなかできないことだろう。それでも篤人はいつも「どうしたの」とすぐに応じてくれるのだ。それもこれも自分があまりになにもできないせいなのだが。

今まで一季の頼みごとを嫌な顔ひとつせず聞いてくれてはいたけれど、今日こそはいいかげん篤人も呆れているかもしれない。そう自己嫌悪に苛まれているときだった。

「そう……。だったら……仕方がないな」

ぼそりと低い呟くような声が頭の上から降ってきたかと思うと、一季の腕がぐいと引き寄せられ、体がそれにつられるように傾いた。

「えっ」

そう声を出したとたんに、唇が篤人の唇で塞がれた。出した声はそのまま篤人の口の中に飲み込まれる。

あまりのことに混乱していると、篤人は強引に舌を押し込み、一季の口内を舐め回した。敏感な粘膜を舌でぞろりと探られ、一季の背にぞくぞくとした今まで覚えたことのない感覚が這い上がる。

「んっ、う、ん、んん……っ」

いつの間にか一季の体は篤人に正面から抱き込まれ、身動きが取れなくなっていた。抵抗しようにも頭の中はパニックを起こしたままで、されるがままになっていた。

「……は、あ……んっ、う、ん……」

篤人の厚ぼったい舌が一季の舌を絡め取り、いやらしく蠢いている。なぜ篤人がこんなことをするのか一季にはわからない。逃れようとするのに、生まれてはじめての深い濃厚なキスでさらに混乱するばかりだった。

「あつとお……っ、なんで……っ」

ようやく唇が離れると、一季は半分ベそをかきながら訴えた。けれど、篤人の方はうっすらと笑みさえ浮かべ「いっくんが悪いんだよ」と幼い頃に呼んでいた一季の愛称を甘えたような声音で口にする。

「いっくんが女の子とつき合うなんて、俺には許せないんだよ。これまでどんだけ苦労して女どもからいっくんを守ってあげたと思ってんの？ いや、女だけじゃなくて、いっくんをいやらしい目で見ると野郎からもだけど」

ふん、と憤慨したように篤人は鼻を鳴らした。それを聞いて、一季は目を見開き、篤人を見返した。

「あ、篤人……？」

「もう限界だからね。いっくんをきれいなまんま大事にしていたのに……。妙な虫がついて汚されるなんて考えるだけでぞっとする。いっくんは俺のなんだから。だからね、いっくんのはじめても俺がもらうし、いやらしいことも全部教えてあげる。そしたら官能小説だってあつという間に書けちゃうでしょ。俺のしたこと全部書いていいから。ね？」

ね？ と可愛く言われても……。

篤人の言うことはまるでわからないがしかし、自分の身に迫っている危機はなんとなく感じる。ここから逃げなくては、と一季は身じろいだ。だが、それは許さないとばかりに拘束が強まる。

「篤人、苦しいって。離して……！」

「だ一め。これから俺のものになるんだよ。大丈夫、今までだって俺いっくんのこと傷つけたりしなかっただろ？ いっくんのこといっぱい可愛がってあげるだけだから」

整った唇がくっ、と形を歪め極上の笑みを浮かべるなり、すぐさまベッドの上に押し倒され、のしかかられた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>